

道德律と宗教律

久松 眞 一

この小論は、私がこの夏妙心寺派高等布教講習會に於てなした講演を禪宗誌の記者が摘録して、同じ題目の下に、同誌八月號に掲載したものと根本思想に於ては變りないが、構想或は行論の順序等に於て必ずしも同じではない。

私は今、道德律と宗教律とに就て考へて見たいと思ふ。茲に私が律といふのは、私どもが依つて以て思惟し、又は感情する法則もしくは規範を意味するのではなくして、特に依つて以て意志し、行爲するそれを意味するのである。随つて、私が茲に道德律といひ宗教律といはうとするものは孰れも日常私どもが自由に意志し行爲する場合にその標準となる規範であつて、一は道德的な規範、他は宗教的な規範である。併し、行爲の規範に道德的と宗教的との別が果して實有するであらうか。若し實有せずとすれば、私どもが通常差別あるものとして無難作に用ひて居る宗教的行爲とか道德的行爲とかいふ語、或は眞諦とか俗諦とかいふ語も結局は差別ある内容を實有せぬ空虚なる概念になつてしまふであらうか果してどうであらうか。この問題は宗教そのものに取つても、宗教學に取つてもかなり重要な問題ではあるが、これに關しては、宗教的表象そのものにも一見相

反する結論を生ぜしめる如き契機となるものがあり、随つて又これに關する學說も區々であつて容易に解決し難いのである。それであるから、私は茲に主として禪に例證をとつてそれに關する宗教的表象を微細に検討し、それが如何なる結論に導くかを考察して見ようと思ふ。

趙州が南泉に「如何是道」と問ふた時に、南泉が「平常心是道」と答へ、白居易が烏窠に「如何是佛法大意」と問ふた時に、烏窠が「諸惡莫作、衆善奉行」と答へ、棲隱が「如何是平常道」といふ僧の問に對し、「和尚合掌、道士擎拳」と答へたる如き、或は『法華』に「治生產業皆與實相不相違背」といひ、或は「到得歸來無別事、廬山烟雨漸江湖」といふ如きを見れば、禪に於ては恰も道德律の外に特に宗教律といふやうなものはないかのやうに思はれるであらう。併し又、『少室六門』に「但是不見性人、妄稱是佛、此等衆生是大罪人、誑他一切衆生令入魔界。若不見性、說得十二部經。盡是魔說。」とあり、又「若不見性、念佛誦經布施持戒精進、廣興福利、得成佛否。答曰、不得。又問、因何不得。答曰、有少法可得是有爲法。是因果、是受報。是輪廻法。」とあり、又「佛無持犯。心性本空。亦非垢淨。諸法無修無證無因無果。佛不持戒。佛不修善、佛不造惡、佛不精進。佛不懈怠。佛是無作人。」とあり、更に「若擬修無作法、先須見性然後息緣慮。若不見性得成佛道、無有是處、有人撥無因果。熾然作惡業、妄言、本空作惡無過。如此之人墮無間暗黒

地獄永無出期。」とある如きを見、又『會元』に「三祖僧璨大師爲居士時、謁二祖曰、弟子身經風恙、和尚懺罪。祖曰、將罪來與汝懺。士良久曰、覓罪了不可得。祖曰、我爲汝懺罪竟、宣依佛法僧住。」とあるを見、又『圓覺經』に「一切諸法皆眞如相、無男女相、無自他相、無犯無持、名眞持戒。」とあるを見、又六祖が「不思善不思惡正與麼時、那箇是明上座本來面目」といふを見、又大燈がその法語に「彼ノ心佛ハ善ヲモ修セズ、惡ヲモ造ラズ、戒律ヲモ持タズ、精進ヲモセズ、懈怠ヲモセズ、貪著ノ心無キモノナリ。」といひ、「白衣ハ妻子アリ姪欲ヲ除カズ、何ニヨツテ成佛スルヲ得ンヤ。答テ曰ク、只見性ヲ云ヒ姪欲ヲ云ハズ、只見性セザルガ爲ナリ、只見性スルコトヲ得バ姪欲空寂トシテ自ラ斷除ス。」といひ、「善ヲモ思ハズ惡ヲモ思ハザル處、那箇カ是本來ノ面目ト、行住坐臥ニ心ヲ着テ見ヨ。忽然トシテ彼ノ面目ニ相逢フ日アラン。」といふを見、夢窓がその夢中問答に於て「イマダ心地ヲサトラザル人ハ、タトヒ種々ノ善ヲナセドモ、皆有漏ノ善トナルナリ。……心地ヲ悟ラザル人ハ、所作ノ善根タゞ有爲ノ果報ノ因ナルガ故ニ出離ノ要道トハナラズ。」といふを見、大應がその假名法語に於て「善惡に住せざる時は十方世界只是れ一心なり。……無き事に迷ふて善惡の果報を受くる故に佛の諸法は夢に似たり又幻の如しと説き玉ふ。夢みる時は善も惡も有り〜と思へども、覺めて見たれば何もなし。」といふを見、更に『禪戒鈔』に「オロカナル族ハ、五戒十善二百五十戒五百戒等ヲ受持スル小乘ノ行人アレバ、此名相ノ砂石ヲ以テ一句ノ聞

法ヨリモ功德多シト思ヘリ。或ハ又纔ニ大乘ノ身儀行操ヲ見テ、若シ一時ノ非アレバ、彼ノ過ヲ説テ所學ノ法モ邪ナルベシト謗ルコトアリ。是ハ無始塵劫ヨリ有爲ノ善惡ノ法ニナレタルユヘニ、有爲ノ惡ヲ止メテ有爲ノ善ヲ修スルトコロハ偏ヘニ功德ト思ヘリ。更ニ有爲ノ止惡修善ハ出世ノ財ニアラズ。」などあるを見れば、道德律の外に特に宗教律といふやうなものが全くないとも思はれぬであらう。然らば、道德律の外に特に宗教律があるとするのが眞であらうか、或はないとするのが眞であらうか。

西洋哲學に於ては、カントをはじめその派の人々、例へばフイヒテにしても、新カント派のウインデルバンド、リツケルトにしても、コーヘン、ナトルプにしても皆、意志又は行爲の規範は道德律の外にはなく、又あるべきでないと考へて居る。これは、人間の行爲はすべて善惡の道德的自覺に基く自律的のものでなければならぬといふ論據に立つ考である。それであるから、こゝでは道德律の外に特に宗教律といふやうなものは認められない。随つて、この人々にはたとひ宗教的な人でも、道德律によつて行爲するものであり、又すべきものであると考へられて居る。ことにコーヘンなどは、道德的な人こそ眞に宗教的な人であつて、道德的な人の外に特に宗教的な人を認めぬ程に宗教を道德化してしまつて居るから、道德的行爲の外に特に宗教的行爲を認めぬのはむしろ當然

なことであるが、宗教の道德化がそれ程極端にならずして、宗教は凡ての義務をば神の命令として認識することであるとして、宗教を道德から差別したカントでも、形而上學的實在性を持つて居る規範意識が良心と共に與へられて居ることを信じて價值生活をするのが宗教であるとして、宗教的アプリオリを認めたウインデルバンドでも、その宗教に道德的規範とは別な行爲の規範を認めぬから、道德的行爲と異つた宗教的行爲といふやうなものを認めぬのである。カント派の人々に限らず、禪的宗教の解釋者の間にも、日常の道德的生活を營んで行くことの外に禪的生活はないと往々考へられて居るやうである。かゝる人々に取つては、前掲の「平常心是道」とか「諸惡莫作、衆善奉行」とかいふやうな語句は直ちに道德的生活の外に宗教的生活のないことを立證するに足るものとなるであらう。併しながら、實際果してこれ等の語句はさういふ例證となるであらうか。縦又、それ等の語句は外觀通りに例證となるにしても、同じく前掲の「不思善不思惡正與麼時」とか「佛不修善、佛不造惡」とか「心地ヲ悟ラザル人ハ、所作ノ善根タゞ有爲ノ果報ノ因ナルガ故ニ出離ノ要道トハナラズ」とかいふやうな語句はむしろ却つてその反證とはならぬであらうか。

西洋の哲學者が一般に多くさうであるやうに、カント派の哲學者たちも宗教の學問に關しては、少くともその本質的素材を、道德的宗教と通常觀られて居るクリスト教に採り勝であるから、宗教

を道德的に觀て行くといふこともあながち理由がないでもないが、クリスト教はたとひコーヘンなどの考へて居るやうに、人間が日常只管に道德的自覺に基づいて行爲すべきことをのみ教へる宗教であるにしても、その教が單に人間的自律的ではなくしてむしろ神の他律的な教であり且神の教であるが故に遵奉される限り、道德に還元されたり道德的に理解されたりし得ない契機をその裡に藏するものといはねばならぬ。この契機こそクリスト教をして單なる道德に終らしめずして、特に宗教たらしむる所以のものである。

この契機より觀れば、道德的自覺に基づいて行爲することの外に宗教はないとし道德の外に宗教を認めぬコーヘンよりは、凡ての義務をば神の命令として認識することが宗教であると定義し、恰も道德の外に宗教を認めた如く見える點に於て、カントの方がはるかにクリスト教の本質を把捉して居るといはねばならぬであらう。併しながら、神の命令として認識された義務をば、純粹に自律的な道德的義務と同一視し特に宗教的な行爲を認めぬ點に於て、カントもなほコーヘンと同じくクリスト教の本質を眞に把捉したものとはいひ難いであらう。カントでは、吾々が自己の道德的自覺に基づいて自律的に定めた義務をば只神の命令として認識することが宗教であるから、宗教に於ても吾々の爲すべきこと即ち義務は神意によつて定められるのではなくして、神意を俟たずして吾々の道德的自覺によつて定められることゝなるのであるが、宗教信者に取つては、吾々のなす

べきことは神意を俟つて始めて定められるのである。即ち、宗教に於ては、吾々のなすべきことは神意なるが故になすべきのであつて、單に吾々の道德的自覺に基づいてなすべきのではない。宗教に於ては、神意の體驗もしくは信仰なくしては、吾々のなすべきことは定められないのである。かゝることは道德の自律性に反するが故に、道德的行爲以外に宗教的行爲といふやうなものを承認せぬカント派の人々からは、未開なるもの、反道德的なるもの、不合理なるもの、迷妄なるものとして排棄せられるであらう。

併しながら、カント派の人々が宗教信者の宗教意識の直接所與を、道德の自律性に反するが故に排棄するならば、それは宗教を理解しようとするものゝ態度としては酷しき獨斷といはねばならぬ。宗教を理解しようとするものは、いかに道德の自律性に反しても、宗教意識の直接所與はどこまでも尊重されねばならぬ。否むしろ、却つて道德の自律性に反するやうなところに特に眼を着けなければならぬ。凡そある現象の眞の特異性は他の現象からは理解し得ない直接性のところにあるのであるから、宗教意識に於ても、道德の自律性に反しそれからは理解し得ないやうなものがあれば、それが爲に排棄すべきではなくして、むしろ却つてそれが爲に重視すべきである。最近宗教學者にオットー、ウオツパーミン、シエラーの如く宗教を内から理解しようとする傾向のものが現れて來たのは同じ動機に基づくものである。

かやうな考によれば、カント派の人々が未開とし、迷妄として排棄したものこそ却つて宗教に本質的なものであるといはねばならぬ。もし神意なるが故に人は日常道德的自覺に基づいて行爲すべきであるといはば、それはなほ未開なる宗教であつて眞の宗教でないところへコーヘンなどはいふであらう。成程、道德を眞の宗教と考へて居るコーヘンに取つては、それは恐らく未開なるものであるであらう。併しながら、もしかの如しとすれば宗教が撥無せられるのみならず、道德が眞の宗教であるといふことそのことさへ無意味なるタウトローデーになつてしまふであらう。それ故、私どもは道德の立場から見てもいかにあれ、クリスト教信者が神意なるが故に道德的自覺に基づいて行爲して居るならばそれを尊重し、そこに宗教の特異性を認めねばならぬ。然らばクリスト教信者は、道德的自覺に基づく行爲を自律的に爲すのではなくして、神意なるが故に爲すのである。即ち、爲すべきことを専らなすべきが故になすのではなくして、爲すべきことを神意なるが故になすのである。これ正しく道德的行爲とは異つた行爲であらう。この行爲は神意の體驗もしくは信仰によつて生起する行爲である。私どもはこゝに宗教的行爲といふ特殊な行爲を認めようと思ふ。この宗教的行爲は神意の體驗を根本豫想とする點に於て、單に道德的自覺に基づく行爲から區別さるべきである。凡ての道德的行爲は道德的自覺によつて成立するのであるが、宗教的行爲は道德的自覺のみのところには成立せずして、神意の體驗によつて始めて成立するのである。随つて、その道德的行爲

の規範となる道德律と、宗教的行爲の規範となる宗教律とはその根柢を異にするといはねばならぬ。

私は上來、クリスト教のやうに道德的といはれて居る宗教に於ても、宗教である限り信者の行爲は、道德的自覺に基づく道德的行爲ではなくして、神意の體驗に基づく宗教的行爲であることを論述して來たが、これはクリスト教に限らず、いかなる宗教に於ても妥當である。禪に於ても、鳥窠和尚が佛法の大意を問はれて諸惡莫作衆善奉行と答へたのを見すると、佛教は道德を行ふことの外にない如く見えるのであるが、鳥窠和尚の眞意は單に道德的行爲をすることではなくして、クリスト教に於て神意の體驗に基づいて行爲すると同じやうに、見性に基づいて行爲をすることを意味すると見なければならぬ。通常の道德的自覺による行爲はいかに完全であつても、若し見性しなかつたならば禪的には價值ある行爲とならない。それであるから、夢窓國師は「イマダ心地ヲサトラザル人ハ、タトヒ種々ノ善ヲナセドモ、皆有漏ノ善トナリ、……出離ノ要道トハナラズ」といひ、『禪戒鈔』には「有爲ノ止惡修善ハ出世ノ財ニアラズ」といふのである。茲に有漏の善とか有爲の止惡修善とかいはれるものは道德的自覺に基づく善行に外ならぬのである。かゝる善行はいかに積み重ねることも出世の財、即ち禪に於ける宗教的善を構成するに足らないのである。禪に於ける宗教

的善は見性といふ宗教的體驗によつてのみ成立するものである。禪に於ては、見性しなかつたならば善惡共に非である。禪に於ける眞の善行爲とは見性の外にないのである。それ故援隊禪師はその『和泥合水集』に於て「眞實ノ持戒トイツバ見性悟道ナリ。……………見性スレバ一切ノ戒律一時ニ圓持ス。……………眞實ノ戒壇ヲ踏マント欲セバ自己本分ノ田地ヲ踏ムベシ。」といつて居る。南泉和尚の所謂「平常心是道」も、禪の道は平常の道德的意識であるといふのではなくして、善惡に任せぬ獨脱無碍なる見性の境涯をいふのである。禪では見性によつて、道德的な善にもあらず又惡にもあらず特殊なる價值を體驗するのである。この價值は道德律とは別な禪的宗教律を成立せしめるものである。この價值にかなふ行爲が禪に取つては價值ある宗教的行爲なのである。而して禪的な人にとつては、この行爲はいかなる道德的の善行爲よりも價值あるのである。これは道德的の立場から見て價值ありとせられるのではなくして、見性によつて價值ありと直接に體驗せられるのである。即ち、道德的價值の理想化によつて成立するものではなくして、見性といふ特殊なる宗教的體驗によつて直接に成立するものである。随つて、それは他の價值に還元せられない特殊なる價值である。そこにその獨立性が確保せられるのである。往々、悟了同未悟とか、到得歸來無別事廬山烟雨湘江湖といふやうな語句が、禪の境涯は日常底であるといふことを表はすものとして用ひられて居るが、これも禪境涯は日常の道德的境涯そのまゝでよいといふ意味に取られてはならない。只、日

常の道德的境涯ならば「悟了してみれば」とか「到り得て歸り來つてみれば」とかいふことはないであらう。同未悟といふのも、無別事といふのも悟了し到り得て後の事、即ち禪の宗教的體驗を経て後のことである。同未悟、無別事の境涯は、日常の生活に於ては到達し體得し得ない、只見性によつてのみ到り得る宗教的境涯である。それであるから言を換へていへばその場合には、見性は同未悟、無別事の體驗であるともいひ得るであらう。かやうに考へて來ると、禪に於ても道德的行爲と別な宗教的行爲が儼存し、又その行爲を律する宗教律が實有することが明かとなるであらう。